学校の教師時代には、特別にふれなかった問題で、いまさらのように、義務教育という法の中にみとめられた生活の、そうした面への苦労の少なかった教師時代が、なつかしくかえりみられました。そして、ただ子どもたちと、とっくむ生活に、とけこんでいけたことを思うと、幼稚園にもそんな時代が一日も早く訪れてくれたらよいがと願います。

地域社会の人々が幼稚園教育を理解して、望ましい幼稚園教育が、がっちりと打ちたてられていくために、私たちの努力は、こつこつとたゆみなく各方面に、続けられていかねばなりません。自分をふりかえってみますと、二十余年の小学校の教師の、しかも主として低学年の生活にあけくれておりながら、その一つ幼ない段階の子どもたちの生活にとりくんでこんなにも真剣に悩み、苦労している多くの教育者のあることを知らなかった自分のうかつさを申しわけなかったと思います。

この頃、幼稚園を、義務教育にすることが望ましい。とゆう意見をきかれるようになってきましたのは、就学前の教育の成果が、みとめられてきたしるしのようにも思えて、さあこれから、と心のしまる思いがします。

そこで幼稚園教育を義務教育とすることによって生ずる種々な問題が考えられてきます。その一つとして、就学前一年の子どもの集団生活へのとけこみ方と、小学校一年の子どもの集団生活へのとけこみ方と、それにともなう抵抗度がどうも幼稚園の場合の方が強いようにみうけられ、個人差のでこぼこが幼ない時代ほど多いように思われます。たとえばいろいろな遊びをしたり、行事をしてみても幼稚園の場合の方が問題が生じます。とにかく現行の一年生の段階を一年下に下げるというような取扱いでなしに、幼稚園の年長組を義務教育とする場合の考慮は慎重になされてほしいと思い、また大勢の人々でこの問題を真剣に考えたいと思います。そして、制度の上からも安定した教育機関となり、何事につけても、義務教育でさえ充分にできないものを、ましてや幼稚園などは……などといわぬ日の訪れを、ひたすらに待望してやみません。（幼稚園長・静岡）

初心者の悩み

鈴木ノリ

「先生さようなら」と、保育中は手に負えない、いたずらをして暴れまわっていた子どもたちも、お帰りのときだけは素直になって、ピョコンと、おじぎをして帰っていきます。

その後姿を見るにつけ、いつも心さびしく思うことはYちゃんのこと。

Yちゃんが幼稚園に姿を見せなくなってから、もう二ケ月になります。訪問すると「どうしても幼稚園にいきたがらなくて、どうも困ったものです。今まではそんなことはなかったのですが、最近になってこんなことになってしまって」というありさま。そうしてお家の方では幼稚園をやめさせるつもりでいるのです。

Yちゃんの家から幼稚園までは、子どもの足で四五十分はかかるでしょう。七月はじめまでは、そんなに遠くからも、平気で何ごともなく、元気に登園していたのに、どうして急にいやになったのか

しら、いくら考えてもわかりません。

Yちゃんは口数のすくない、気の弱い、おとなしい子どもでした。あまりお友だちと遊ぼうとせず、だまって見ている方が多かったようです。それだけに幼稚園の生活になじみがたかったのでしょう。

また彼は私たち保育者を悩ます「絵を描きたがらない子ども」だったのです。お絵描きのときは、首を横に振って、頑としているのです。それでも七月までに、二・三回は描いたでしょうか。そのときは、おもしろくないような顔をしながら、丸を描いたり、線をなぐり描きする程度、描かないときはだまって人の描いているのを見ていたり、いたずらをして歩くのです。

いずれにせよ、登園しなくなった原因は、まだはっきりつかんでいませんが、ひとりの子どもを途中から失ってしまったこととその子の心境を察することは残念で仕方がありません。そしてまた私の頭にこびりついて離れない、同じように絵を描きたがらない二・三の子どもの顔、いなかのことですので入園するまでクレヨンなど手にする機会のすくなかった子どもにとって、クレヨンをもって自由に表現することはむずかしかったのでしょうか。Yちゃんも、その他の子も、それぞれ異った原因を持っているでしょう。しかしここでそれを取り上げることもできませんので省きますが、初心者の第一にぶつかった悩みであり、問題です。原因を追求し、どうしたらこの子どもたちに楽しく、しかも自由にのびのびと表現させるかが、現在の私に課せられた研究題目であり、また今後も取り組まねばならぬ問題でしょう。

ここに取り上げた問題はほんの一例にすぎず、私にとってはあらゆることが研究の対象です。

地方の幼稚園にいると、欲しいと思う参考書も手に入らず、ついて研究が中途半端なものになってしまいがちですが、今後全力をつくして問題にとりくんでいきたいと思っています。

（幼稚園教諭・会津）

「日常の記録のこと・知能テストのことなど」

菊地明子

毎年、学年末に私たちのしなければならぬ重大な仕事に、指導要録の記入があります。一年間の保育のあと、ひとりひとりの子どもの顔、動作を頭の中に画きながら「肌の工合は……」「鼻汁はどうだったかな」などと自分で作った不完全なメモをみたり、日誌を読みかえしたりしながら、少しでも、その子どもの本当の成長のあとを、なるべく良心的に正確に記録したいと思って頭をいためるのです。そして、いつも、記録をしながら思うことは、来年は何とか能率的で最も適切に、各領域についての子どもの行動をとらえるような様式を工夫してやってみようなどと思うのですが、まず、恥かしいながら一学期の中はそういうノートをうずめていた文字もだんだん閑散となって来たり、平均に記録がいきとどかなかったり、という、あまりみっともいい状態ではなく、とうとう三学期を迎えるありさまです。